

盾塚・鞍塚・珠金塚古墳出土資料からみる 鳥舌式鉄鏃の変遷について

池田 旭

はじめに

古墳時代中期前半に盛行する、鳥舌式鉄鏃をはじめとする山形関を有する鉄鏃は、鈴木一有氏によって、特に象徴的側面に着目した研究が精力的に進められた¹⁾。その成果から、山形関を有する鉄鏃は、古墳時代中期前半における地方の有力者とヤマト王権との関係性を考える上で極めて重要な資料になりうるということがわかる [鈴木2000、同2003a]。しかし、これまでの編年研究では、鏃身部の長さの差異から前後関係を推測することが多く、他の要素に着目した変遷観は確立されていない。モノの歴史的意義に関する研究を深化させるためには、そのモノの詳細な変遷観の確立が求められる。そこで、本稿では山形関をもつ鉄鏃の一型式である鳥舌式鉄鏃を取り上げ、その変遷について検討する。

分析対象とする資料は、大阪府古市古墳群に属する盾塚古墳・鞍塚古墳・珠金塚古墳南塚から出土したものを中心とする。この3基の古墳は、古市古墳群において最大の規模をもつ前方後円墳である誉田御廟山古墳の北東約100mの地点に、裾を接するように立地している。鉄鏃をはじめとする各種の副葬品の年代観から、盾塚古墳、鞍塚古墳、珠金塚古墳の順で築造されたと考えられる [末永1991、水野2003]。考古資料の変遷を考える場合、地域差による形状の違いと時期差による違いの混同を避ける必要がある。その点において、この3古墳は極めて良好な資料である。

以上のことを前提に、本稿では、鏃身部長以外の要素も含めた鳥舌式鉄鏃の変遷観の確立を目的として、形状組成の変化と各部位の寸法の変化という二つの観点について論じる。また、最後に鳥舌式鉄鏃が変化する社会的背景について若干の考察を試み、今後の検討課題を整理する。

1. 研究史の概観

鳥舌式鉄鏃の変遷を論じるにあたって、先行研究を概観する。本稿は鳥舌式鉄鏃に着目したものであるため、鳥舌式およびその他の山形関を有する鉄鏃に関する研究史を中心に取りあげる。そして、鳥舌式の変遷観の現況と分析手法の課題を把握し、本研究の分析視角を示す。

(1) 名称について

鳥舌式鉄鏃とは文字通り、鳥の舌のような形状をしていることからつけられた型式名称であるが、「柳葉式」と呼称される一群の中の一型式に分類される。本稿では柳葉式鉄鏃を「側縁が直線

的あるいはS字状のカーブを描く刃部をもつ形式」と定義し（図1）、なかでも、山形関を有する柳葉式鉄鍬を鳥舌式と分類する²⁾。

古墳時代鉄鍬の分類研究の歴史において、「鳥舌式」の型式名称が用いられるようになった契機は末永雅雄先生が1969年に発表した論文「日本鉄鍬形式分類図」に求められる。末永先生は古典籍にみえる鍬の呼称を集成し、それぞれの呼称と実際に遺跡から出土する形式の同定作業を行った。そのなかで、鳥舌式鉄鍬については、『貞丈雑記』や『武用弁（辨）略』に記述があることを示されている〔末永1969〕。

その後は、多形式の鉄鍬の編年研究では「柳葉式+英数字」で呼称され〔杉山1988、川畑2015b〕、古墳時代中期前半の鉄鍬に焦点を絞った論稿や〔田中1995〕、特定形式を取りあげて論じる論稿では〔鈴木2003a〕、「鳥舌式」あるいは「鳥舌鍬」という呼称が用いられる傾向がある。

本稿において使用する鳥舌式鉄鍬の細部の名称は図2の通りである。

広義の柳葉式				
柳葉式	けんしん式	ちようぜつ鳥舌式	腸扶柳葉式	二段腸扶柳葉式
柳葉式			腸扶柳葉式	

図1 柳葉式鉄鍬の分類

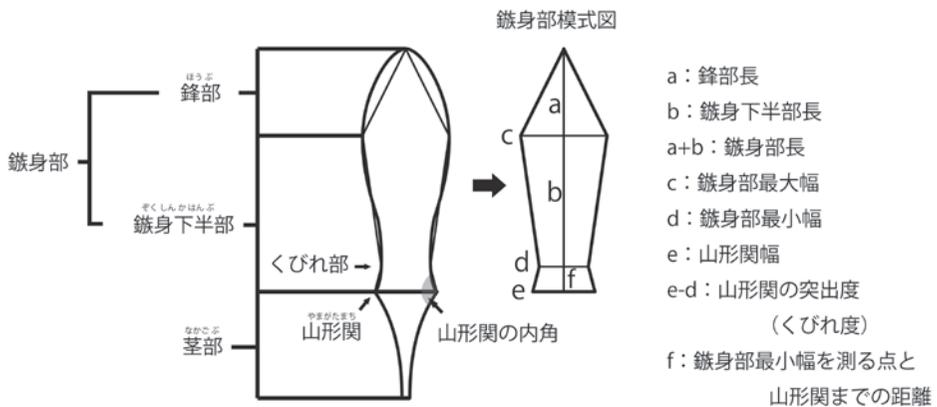


図2 鳥舌式鉄鍬の各部名称

(2) 鳥舌式の変遷観について

鳥舌式鉄鍬は4世紀末頃から古墳に副葬されるようになり、5世紀前半をピークとして、5世紀中葉を過ぎると副葬例は極端に減少する [杉山1988、水野2003、川畑2015b]。

形態の変化に関しては、鍬身部に長身化傾向があることは指摘されていたものの、同一埋葬施設から出土した資料においても鍬身部長に個体差が大きいことが確認されている [鈴木2003a、川畑2015a]。したがって、鳥舌式鉄鍬1点を取りあげて、製作時期を絞り込むことは困難であるとみなされてきた。そのようななか、松木武彦氏は鳥舌式鉄鍬を含む5世紀の柳葉式鉄鍬を、楕円フーリエ解析の手法を用いて検討し、細長化傾向があることを指摘した [松木2020]。長身化するという見解は真新しいものではなかったが、鍬身部長以外の要素も含めた、全体の形状の変化を明らかにしようとした点で重要である。また、そのような変化は近畿地方周辺からの出土資料において認められ、九州地方や朝鮮半島の出土資料は様相が異なることについても指摘した。従来の研究では注目されることがほとんどなかった、鳥舌式鉄鍬の地域性に着目したことは、研究史上の一つの画期に挙げられる。

(3) 研究史の課題

鳥舌式鉄鍬の変遷に関しては、鍬身部長の差異に着目される場合が多く、その他の要素を含めた全体での変遷を把握しようとする研究が少ないことがわかる。例えば、山形関の突出度や、鍬身部最小幅を測る点と山形関がどれだけ離れているかという要素は着目されてこなかった。この二つの要素は、山形関をどの程度鋭く突出させるかという点を左右するため、変化が追える可能性がある。また、鍬身部の長身化という変化においても、鋒部と鍬身下半部に分けてみた場合に、それぞれがどう変化しているかという問題もこれまで論じられていない。

このような研究史の現況から、鍬身部長以外の要素も含めた視点で、変遷を考える必要があると考える。そこで、次章ではその分析手法について述べる。

2. 分析の手法

前章で述べた課題を前提として、本稿における分析では、①鋒部長 ②鍬身下半部長 ③山形関の突出度 ④鍬身部最小幅を測る点と山形関との距離 という四つの要素の寸法に着目し、鍬身部全体の形状の変化について検討する。

そのために、三つの基準を設けて鳥舌式を18通りの形状に分類する (図3)。

一つ目の基準である「鋒部長に対する鍬身下半部長 (b/a)」は、鍬身部最大幅を測る点が鋒部側と山形関側のどちらに寄っているかを表す。数値が小さくなるほど、鍬身部最大幅は山形関側に寄っていることになり、大きくなるほど鋒部側に寄っていることになる。今回分析対象とした資料では、1.0~2.9cmの個体が確認できたため、一の位によって三段階に区分した。

二つ目の基準である「鍬身部最小幅を測る点と山形関との距離 (f)」は、山形関の内角の鋭さを表す。数値が小さくなるほど山形関は鋭くなり、大きくなるほど鈍くなる。今回分析対象とした資料では、0.2~1.2cmの個体が確認できたため、それらを三段階に均等に割り付けられるよう、

0.6cm と1.0cm で区分した。

三つ目の基準である「山形関の突出度 (e-d)」は、山形関の明瞭度を表す。数値が小さくなるほど山形関は不明瞭になり、大きくなるほど明瞭になる。今回分析対象とした資料の80%以上 (22/27点) は、0.05~3.0cm の範囲に収まった。そこで0.2cm、すなわち両側に0.1cm ずつ突出するかどうかで二つに区分した。本稿では0.2cm を超えるものを「明瞭」、0.2cm に満たないものを「不明瞭」な山形関と呼称する。

そしてこれらの基準で分類した各形状を模式的に表したのが図の4である。古墳別にどの形状が多いのかを網掛けして示すことによって、形状組成の変化の傾向を把握することが容易になる。

以上の分析手法を用いて、次に3基の古墳出土資料の分析を行い、その変遷過程を検討する。

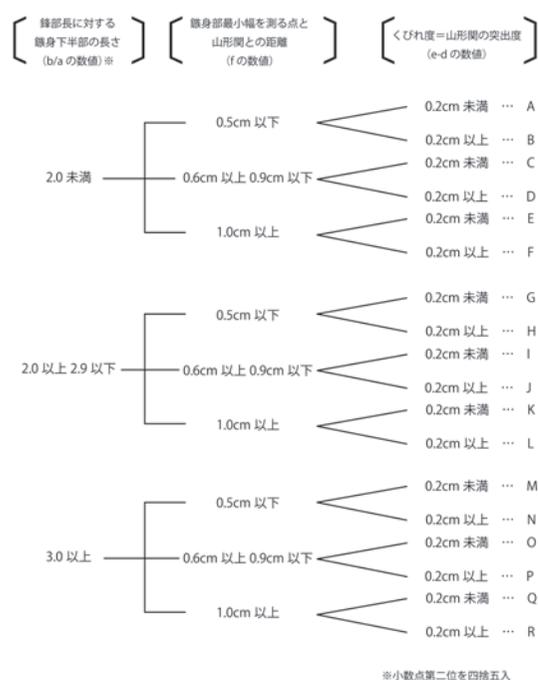


図3 鳥舌式鉄鏃の形状分類基準

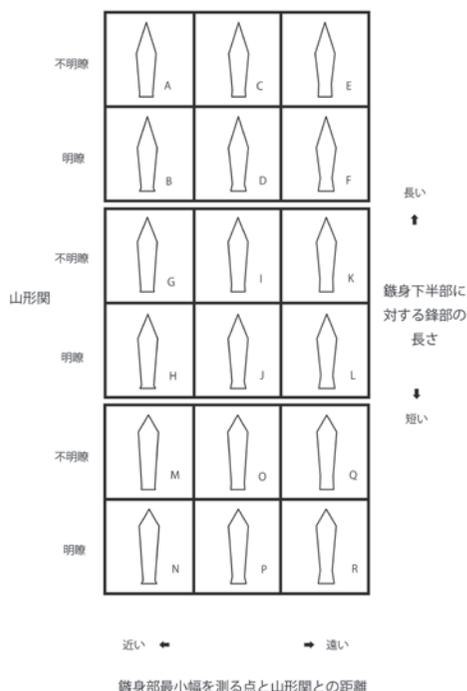


図4 鳥舌式鉄鏃の形状分類各種

3. 各古墳出土鳥舌式鉄鏃の分析

(1) 盾塚古墳

盾塚古墳は5世紀前半に築造された墳丘長73mの帆立貝形古墳で、武器・武具をはじめ、豊富な副葬品が出土した。特に粘土槨上面全体を覆うようにして、赤・黒2種、11点の盾が出土したことが特徴として挙げられ、古墳名の由来となった。

鉄鏃は割竹形木棺内に大きく6群に分かれた状態で検出された。末永雅雄編『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』(以下、「報告書」)の記載によるとその内訳は、A群が94点、B群が43点、C群が44点、

D群が31点、E群が79点、F群が84点の計375点からなる。片刃式のみで構成されるC群以外は、いずれも複数の形式で構成されている。

鉄鍔組成から、編年上の位置を考える上で手掛かりとなるのが二段腸扶柳葉式鉄鍔である。

二段腸扶柳葉式はその名称の通り、上下二段に分かれる腸扶をもつ柳葉式で、鋒が細く尖るもの(図5)が古相に位置付けられることがこれまでの編年研究の蓄積で明らかにされている[川畑2015b、鈴木2003b]。盾塚古墳において、二段腸扶柳葉式の出土は41点と報告されているが、そのうち1点は古相の二段腸扶柳葉式に該当する。この古相の二段腸扶柳葉式を多く出土した古墳の例が大阪府和泉黄金塚古墳であり、盾塚古墳の築造年代を考える上で手掛かりとなる。

報告書の記述では、盾塚古墳から出土した各群のなかで、鳥舌式はE群とF群に含まれている。E群の鳥舌式は「E-3」、F群の鳥舌式は「F-2」という呼称である。それらのなかでも、比較的保存状態が良好であったもの10点を図示した(図6・7)。各図の隣には、[鋒—鍔身部最大幅—鍔身部最小幅—山形関幅]を把握するための模式図を併せて示している。

各個体の寸法の一覧は表1の通りである。なお、重量の数値に※印をつけているものは、過去に接合を行った際に用いた接着剤の重量のよって、本来の重量よりも大幅に高い数値であると推測できるもので、平均値計算からは除外している。

鍔身部長の平均値は約5.6cmである。鋒部長(表1・a)は80%(8/10)が 2.0 ± 0.2 cmであり、後述する鞍塚古墳と比較すると個体差は小さい。鍔身下半部長は平均約3.5cmである。

形状分布の傾向として、盾塚古墳を最も特徴づけるのは、 b/a の数値が全て2.0を下回るため、いずれもA~Fの範囲に収まる点である。

また、山形関の突出度(表1・e-d)は、D・Fが50%(5/10)、A・Cが40%(4/10)であるが、鋒部が欠損しているために形状分類ができなかった資料番号4は不明瞭な方に属する。したがって、山形関が明瞭なものと不明瞭なものが5:5の比率で存在することになる。鍔身部最小幅を測る点と山形関との距離(表1・f)は、90%がC~Pの列より左側の形状に分布する(資料番号4も含む)。つまり、鍔身部最小幅と山形関はどちらかといえば近い傾向がある。

(2) 鞍塚古墳

鞍塚古墳は5世紀前半に築造された墳丘長51mの帆立貝形古墳である。盾塚古墳と同様に、充実した武器・武具のセットが副葬されていた。また、鞍金具を含む馬具1式も副葬されており、これが古墳名の由来となった。

報告書の記載によると、鉄鍔は棺内と棺外に分けて副葬されていた。棺外では短茎三角式鉄鍔10点が一まとめで置かれていたのに対し、棺内ではおおよそ4群に分けて配置されていた。その内訳は、A群が59点以上、B群が27点以上、C群が27点以上、D群が40点以上の計153点以上である。遺存状態が悪いものもあり、正確な本数を把握することは困難である。鳥舌式のみからなるB群以外は、いずれも複数の形式で構成されている。



図5 盾塚古墳出土
二段腸扶柳葉式鉄鍔
(縮尺不同)

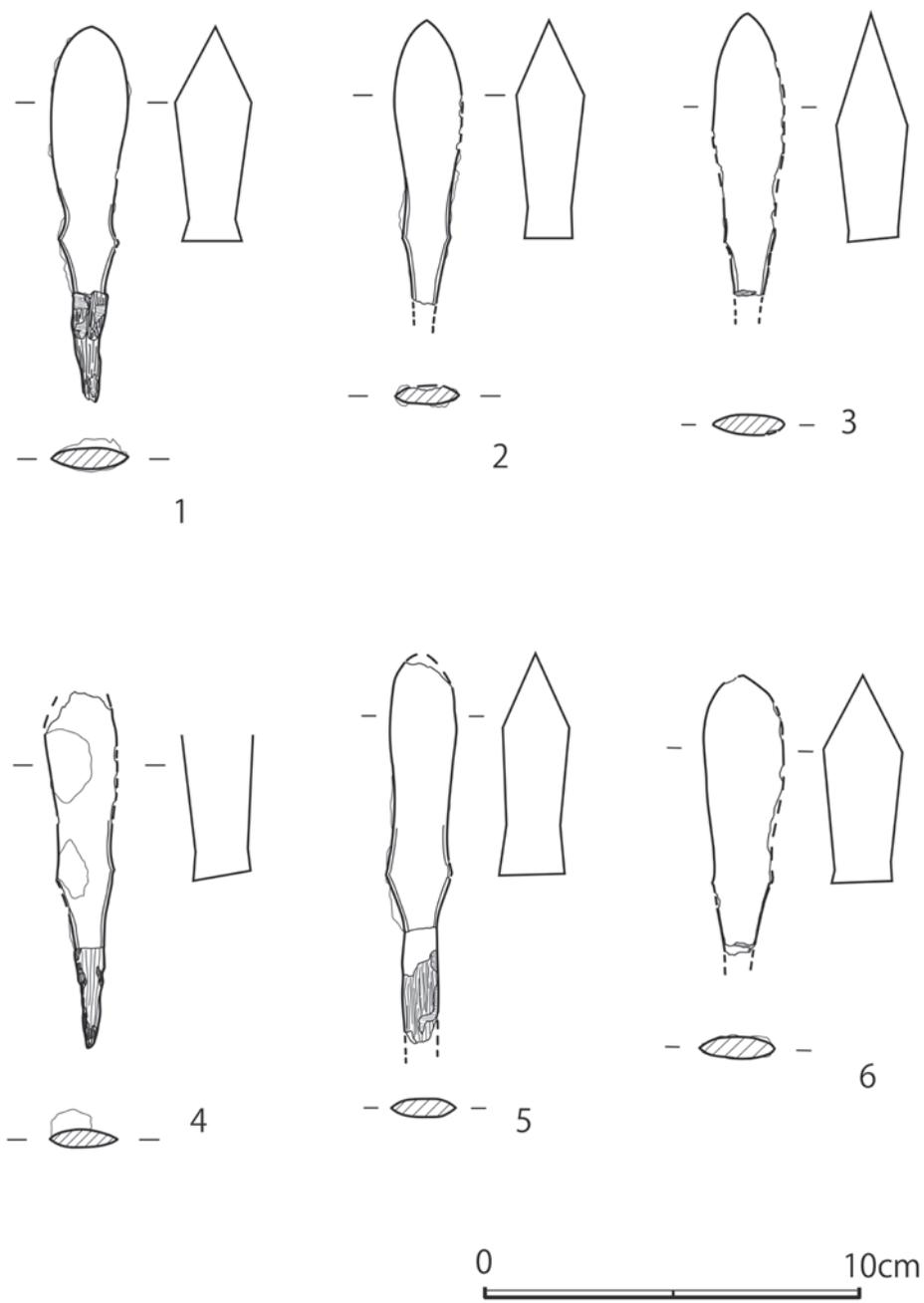


图6 盾塚出土鳥舌式鉄鎌 - 1

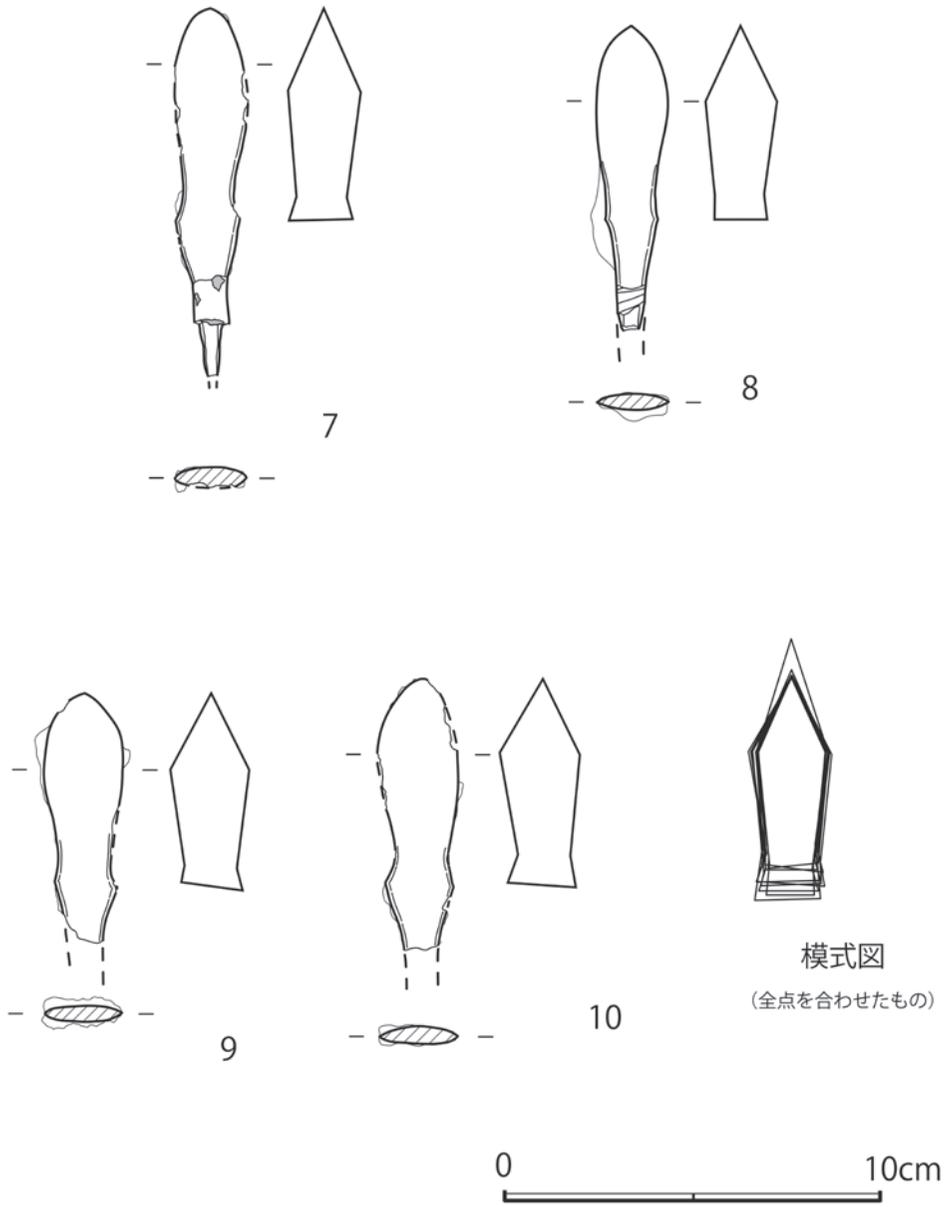


図7 盾塚出土鳥舌式鉄鏃 - 2

表1 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳南柳出土鳥舌式鉄鍬 寸法一覧

盾塚

資料番号	所属群	a	b	b/a	a+b	c	d	e	e-d	f	重量(g)	形状分類
1	E	2	3.7	1.85	5.7	2	1.2	1.55	0.35	0.6	16.45	D
2	E	2	3.8	1.9	5.8	1.75	1.2	1.3	0.1	0.5	12.73	A
3	E	3	3	1	6	1.9	1.35	1.4	0.05	0.2	14.67	A
4	E	-	3.7	-	-	1.85	1.4	1.55	0.15	0.55	15.03	-
5	F	2	3.85	1.925	5.85	1.75	1.45	1.7	0.25	1.2	18.77	F
6	F	2	3.5	1.75	5.5	2.1	1.5	1.6	0.1	0.4	17.28	A
7	F	2.2	3.4	1.545455	5.6	1.95	1.3	1.7	0.4	0.75	15.45	D
8	F	2	3.1	1.55	5.1	1.9	1.3	1.4	0.1	0.6	13.52	C
9	F	2	3.1	1.55	5.1	2.1	1.35	1.6	0.25	0.65	13.58	D
10	F	2	3.4	1.7	5.4	2.1	1.3	1.8	0.5	0.7	14.15	D
平均		2.133333	3.455	1.641162	5.561111	1.94	1.335	1.56	0.225	0.615	15.163	

鞍塚

資料番号	所属群	a	b	b/a	a+b	c	d	e	e-d	f	重量(g)	形状分類
1	A	2.15	5.6	2.604651	7.75	2.05	1.65	1.9	0.25	1.2	21.86	L
2	A	2.5	4.75	1.9	7.25	2.4	1.5	1.65	0.15	0.6	22.4	C
3	C	2	5.4	2.7	7.4	2.25	1.5	1.75	0.25	1	16.63	L
4	C	2.6	5.1	1.961538	7.7	2.3	1.4	1.6	0.2	0.6	18.18	J
5	C	2.05	4.85	2.365854	6.9	2.15	1.45	1.75	0.3	0.4	16.44	H
6	C	1.8	5.1	2.833333	6.9	2.05	1.5	1.6	0.1	0.6	23.86	I
7	C	2.5	5.5	2.2	8	2.2	1.6	1.85	0.25	0.65	28.54	J
8	C	2.2	4.85	2.204545	7.05	2.05	1.4	1.6	0.2	1.1	24.3	L
9	C	2.2	5.1	2.318182	7.3	1.95	1.25	1.5	0.25	0.5	24.74	H
10	C	2	5.75	2.875	7.75	2	1.3	1.65	0.35	1.1	18.16	L
11	C	2.5	5.1	2.04	7.6	2	1.3	1.5	0.2	0.35	22.53	H
12	C	2.5	5.6	2.24	8.1	2.35	1.4	1.75	0.35	0.65	30.16	J
平均		2.25	5.225	2.353592	7.475	2.145833	1.4375	1.675	0.2375	0.729167	21.60354	

珠金塚南

資料番号	所属群	a	b	b/a	a+b	c	d	e	e-d	f	重量(g)	形状分類
1	不明	2.6	5.3	2.038462	7.9	2.2	1.25	1.3	0.05	0.2	24.2	G
2	不明	-	5	-	-	2.3	1.55	1.7	0.15	0.7	22.91	-
3	不明	2.7	5.1	1.888889	7.8	2.3	1.5	1.65	0.15	0.9	25.62	C
4	不明	2.7	4.8	1.777778	7.5	2.1	1.4	1.5	0.1	0.5	23.47	A
5	不明	2.7	6.2	2.296296	8.9	2.4	1.7	1.9	0.2	0.7	41.92	J
平均		2.675	5.28	2.000356	8.025	2.26	1.48	1.61	0.13	0.6	24.05	

鞍塚古墳の鉄鍬組成から編年上の位置付けを考える上で大きな手掛かりとなるのが、短頸式鉄鍬である(図8)。短頸式鉄鍬を本稿では「鍬身部長の3倍未満の頸部長を測る有頸式鉄鍬」と定義する³⁾。短頸式鉄鍬は4世紀末から5世紀初頭に出現し、5世紀中葉までの時期に、多くの古墳に副葬される。これまでの編年研究の成果から、時期が下るにつれて頸部長が長くなることが指摘されている[水野2003、川畑2015b]。鞍塚古墳から出土した短頸式鉄鍬の頸部長は様々であるが、多くのものは頸部長が鍬身部長の2倍未満であるなか、一部では鍬身部長の2倍以上の頸部長を測る個体も含まれている。これは短頸式の出現からある程度下った時期の資料であり、鞍塚古墳の築造年代を考える上で手掛かりとなる。

鞍塚古墳から出土した各群のなかで、鳥舌式は4群全てに含まれている。報告書では、A群の鳥舌式は「A-1」、C群の鳥舌式は「C-1」、D群の鳥舌式は「D-1」という呼称である。それらのなかでも、比較的保存状態が良好であったもの12点を図示した(図9・10)。

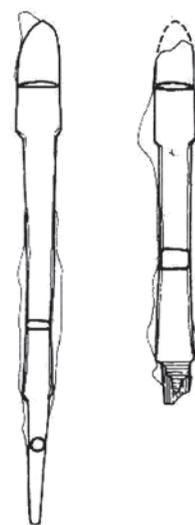


図8 鞍塚古墳出土短頸式鉄鍬(縮尺不同)

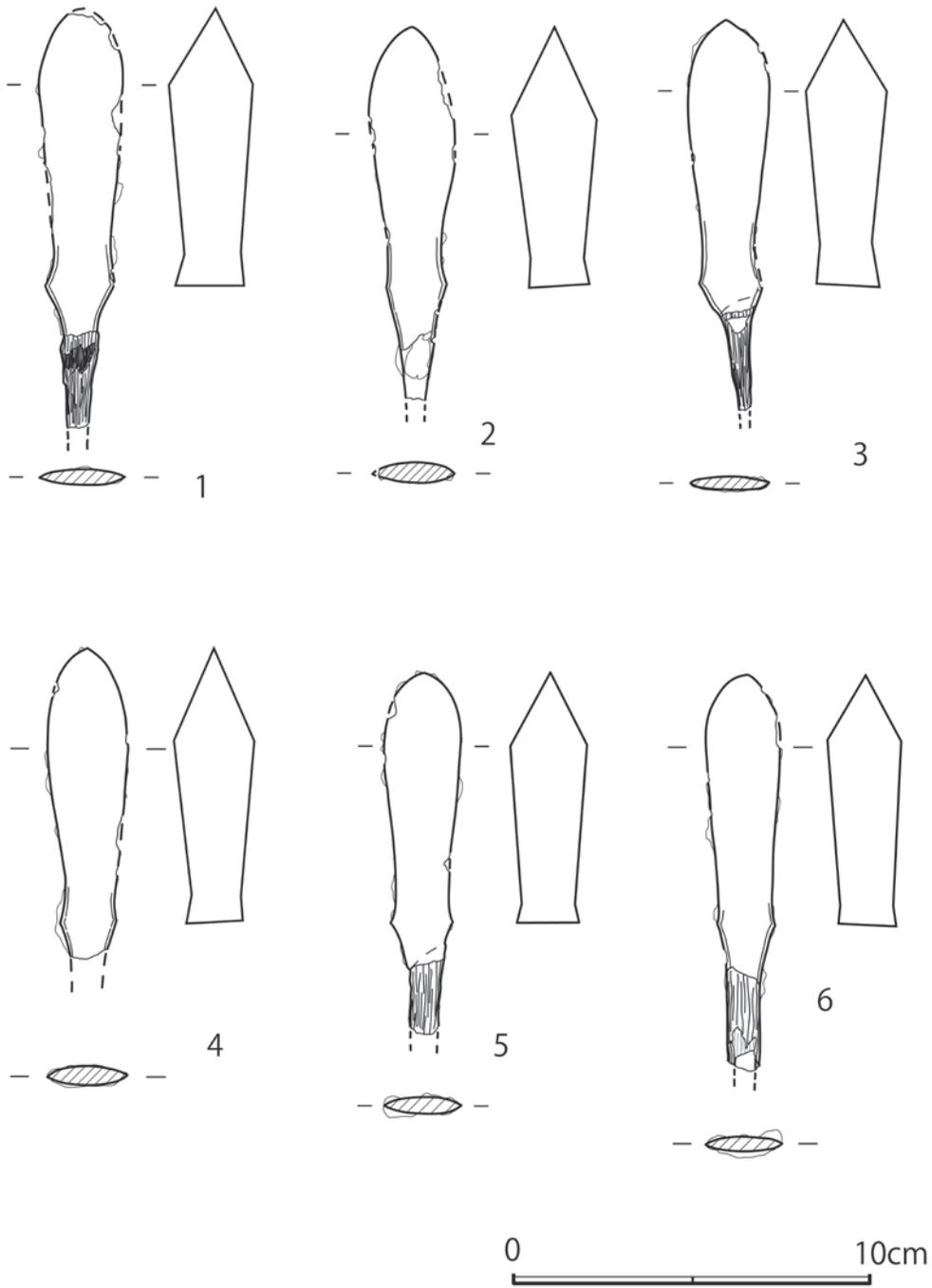


图9 鞍塚出土鳥舌式鉄鏃-1

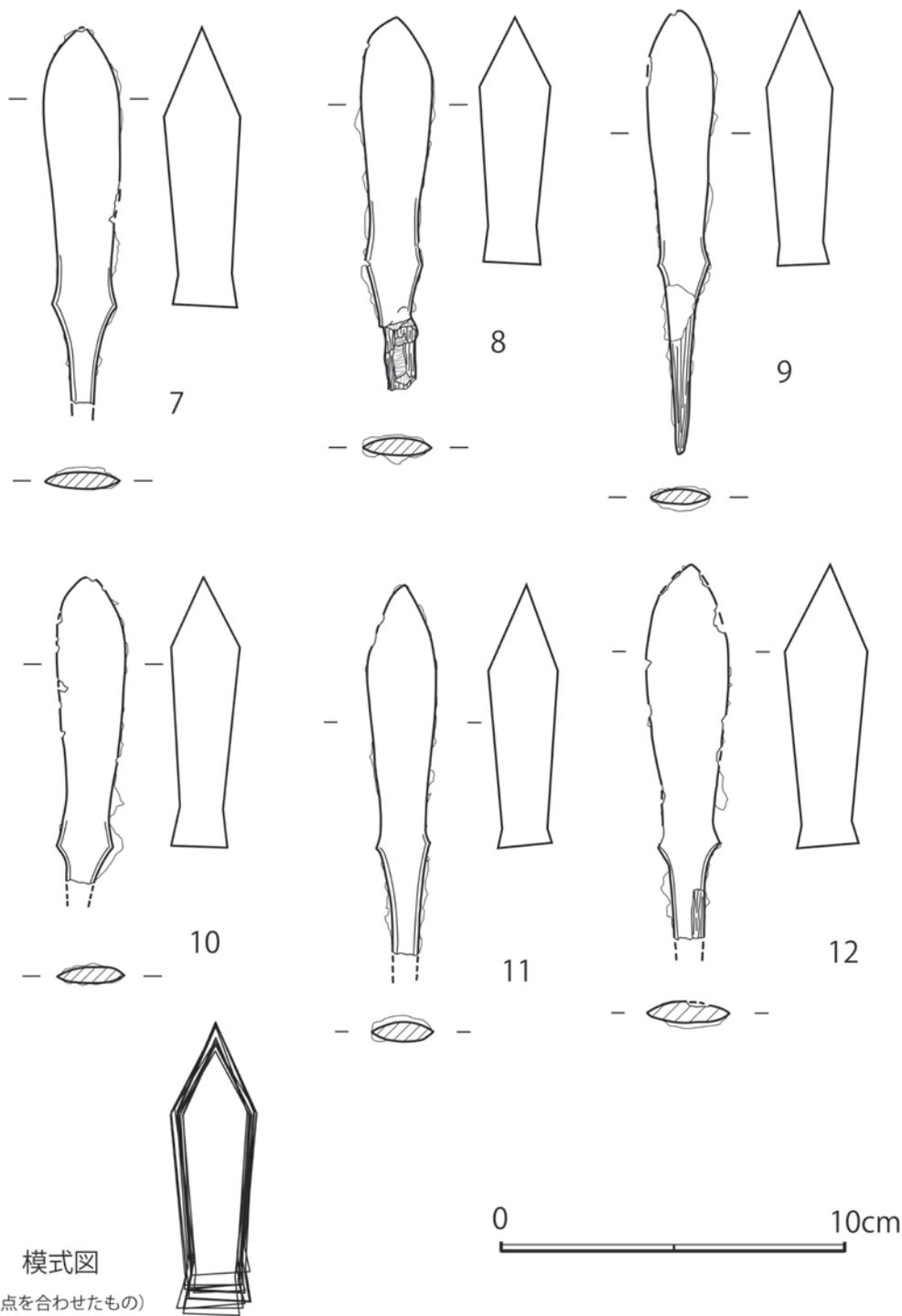


図10 鞍塚出土鳥舌式鉄鏃 - 2

鎌身部長の平均値は約7.5cmを測る。鋒部長は58% (7/12) が 2.0 ± 0.2 cm、42% (5/12) が 2.5 ± 0.1 cmであり、盾塚古墳に比べると個体差が大きい。鎌身部下部長は平均約5.2cmである。

形状分布の傾向として、鞍塚古墳を最も特徴づけるのは、盾塚古墳で多かったA～Fの形状が激減し、分布の中心はG～Lの形状に変化している点である。しかし、盾塚古墳で多くみられたものと同じ鋒部長が 2.0 ± 0.2 cmのものが、依然として過半数を占めていることから、盾塚古墳から鞍塚古墳までの期間は、主に鎌身下半部長が伸長する傾向があることがわかる。

また、山形関の突出度は、H・J・Lが83% (10/12)、C・Iが17% (2/12)であり、盾塚古墳と比べると山形関が明瞭なものの比率が高くなっていることがわかる。鎌身部最小幅を測る点と山形関との距離は、A～Nの列が25% (3/12)、C～Pの列が42% (5/12)、E～Rの列が33% (4/12)となる。つまり、多様性が生じているとともに、鎌身部最小幅と山形関が遠く離れるものの方がやや多くなっている傾向が見出せる。

(3) 珠金塚古墳 (南塚)

珠金塚古墳は5世紀中葉に築造された一辺25～27mの方墳で、埋葬施設は東西方向に軸をもつ粘土塚が、南北に2基設けられていた。いずれの塚にも充実した武器・武具のセットが副葬されており、特に、2人の被葬者の存在が推定されている南塚は副葬品が豊富である。一方、北塚からは、金箔ガラス玉をはじめ、豊富な玉類が副葬されており、古墳名の由来となった。

鉄鎌は南塚と北塚のいずれからも出土しているが、鳥舌式は南塚からのみ出土した。

報告書の記載によると、南塚の鉄鎌はいずれも棺外に、大きく分けて5群に分けて配置されていた。その内訳は、A群が23点以上、B群は不明、C群が27点以上、D群が44点以上、E群が37点以上で、遺存状態が悪いものもあり、結果的に正確な本数を提示することは困難である。

珠金塚古墳南塚の鉄鎌組成から編年上の位置付けを考える上で大きな手掛かりとなるのが、短頸式鉄鎌である。報告書に図化されている資料は、茎部が欠損していることによって頸部の全長が不明な事例が多いが、唯一頸部長がわかる資料は、鞍塚古墳と同様に長身化が進んだ段階の短頸式である(図11)。また、頸部が欠損している資料に関しても、同等以上の頸部長をもつものと推測でき、鞍塚古墳よりも全体的に短頸式の長身化が進んだ段階に位置づけられる。

珠金塚古墳南塚から出土した各群のなかで、鳥舌式はA群とB群に含まれている。報告書では、A群の鳥舌式は「A-1」、B群は「B-1」という呼称である。それらのなかでも、比較的保存状態が良好であったもの5点を図示した(図12)。

鎌身部長の平均値は約8.0cmを測る。鋒部長は全て 2.7 ± 0.1 cmの範囲に収まる。注目すべき点は、鞍塚古墳と比べて鎌身部長平均が0.5cm伸長しているにもかかわらず、鎌身下半部長の平均は鞍塚古墳が5.2cmであるのに対して珠金塚古墳南塚は5.3cmと、ほとんど差が無い点である。

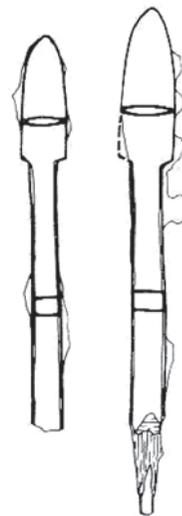


図11 珠金塚古墳南塚出土短頸式鉄鎌(縮尺不同)

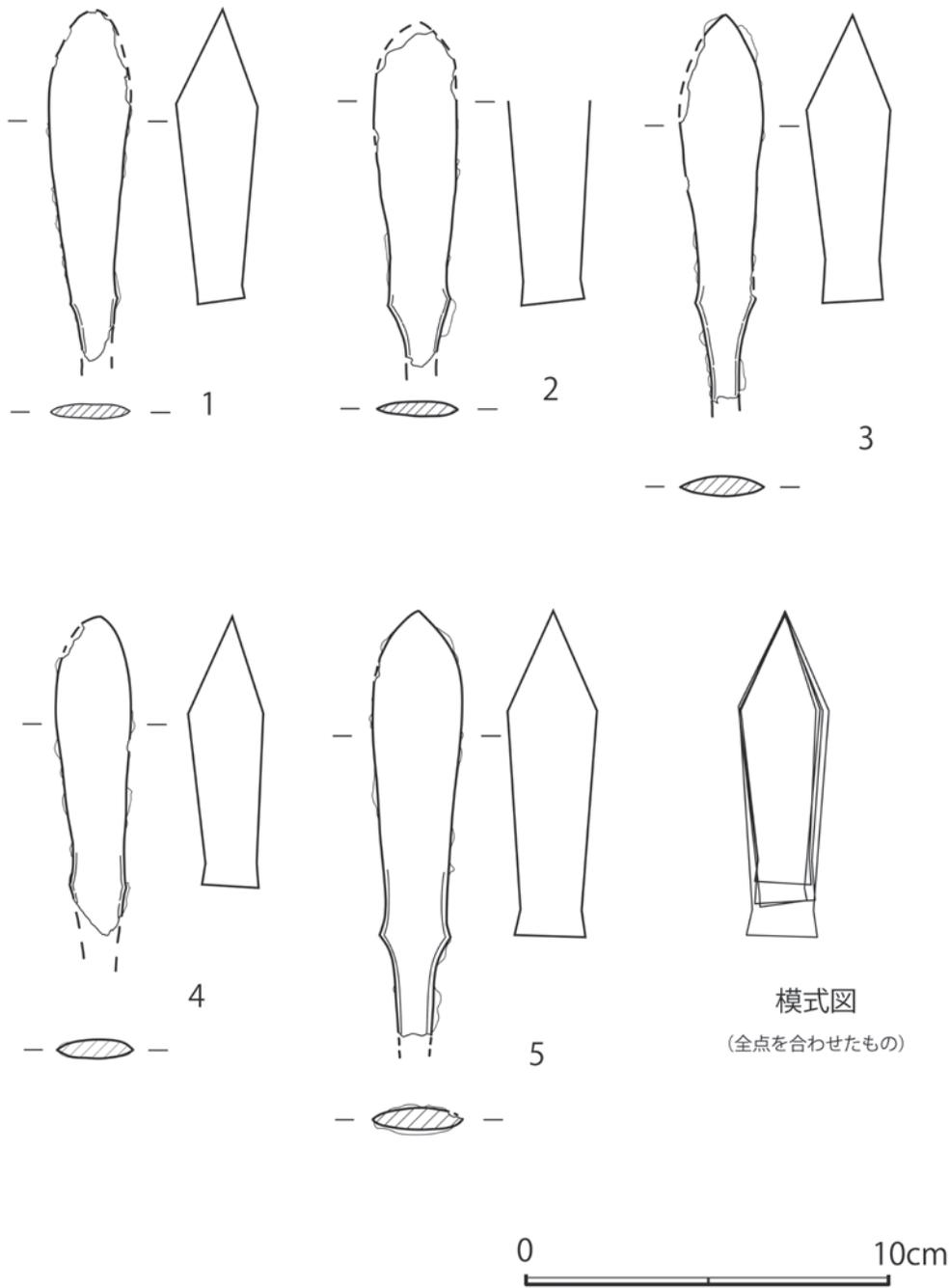


图12 珠金塚古墳南櫛出土鳥舌式鉄鎌

山形関の突出度は、 $A \cdot C \cdot G$ が1点ずつあるのに加え、鋒部が欠損しているために形状分類ができなかった資料番号2の山形関をみると不明瞭な方に属するため、80%（4/5）が不明瞭なものとなる。鍔身部最小幅を測る点と山形関との距離は、全てC～Pの列より左側の形状に分布する。つまり、盾塚古墳と同様、鍔身部最小幅と山形関はどちらかといえば近い傾向がある。

（4）小結

ここで、表1と図13を基に、現時点で想定できる鳥舌式鉄鍔の変遷過程についてまとめる。

盾塚古墳から鞍塚古墳の期間は、鋒部長が $2.0 \pm 0.2\text{cm}$ を測る個体が主流を占めており、鍔身下半部長が平均約 3.5cm から 5.2cm へと 1.7cm 伸長している。そして、珠金塚古墳南榔では、鍔身下半部長の平均にほとんど変化が無い一方、鋒部長は全て $2.7 \pm 0.1\text{cm}$ のものとなっている。つまり、盾塚古墳以降は主に鍔身下半部のみが伸長し、鞍塚古墳の時期に鍔身下半部が 5.2cm 程度になると、珠金塚古墳南榔の時期にかけて鋒部長が伸長していくという変化の流れが推測できる。

この想定が妥当であれば、鋒部長が $2.0 \pm 0.2\text{cm}$ を測るものと $2.5 \pm 0.1\text{cm}$ を測るものが混在している鞍塚古墳には、後者が前者よりも時期が下るものとして、時期差のあるものが一まとめにして副葬されていることになる（図14）。

また、山形関に関しては、明瞭なものとは不明瞭なものが5：5に近い割合でみられる盾塚古墳の時期から、鞍塚古墳の時期にかけて明瞭なものの割合が大きく高まり、珠金塚古墳南榔の時期にかけて不明瞭なものの割合が高まっていくという変遷過程が想定できる。ただし、珠金塚古墳南榔は分析対象にできた資料が少ないことから、鞍塚古墳から珠金塚古墳南榔にかけて、不明瞭なものの割合がどの程度急激に高まるかについては、検討の余地がある。

鍔身部最小幅を測る点と山形関との距離に関しては、3古墳を通じて、図4のC～Pの列が占める割合が50%を下回ることから、明確な変化を見出すことは難しい。一つ留意しておくべき点は、鞍塚古墳の段階で、多様性が生じていることである。

4. 考察

最後に、上記で想定した鳥舌式鉄鍔の変遷が生じた社会的背景について、若干の考察を試みる。

前提として、鳥舌式鉄鍔の鍔身下半部は、山形関に至るまで全て刃部であるものは少なく、多くは鍔身下半部の途中で刃部が途切れている。つまり、鍔身下半部の刃部ではない部分は、頸部をもつ鉄鍔に置き換えて考えると、鍔身部よりは頸部に近いものになる。したがって、鳥舌式鉄鍔の鍔身下半部長が伸長するという変化は、同時期に盛行する短頸式鉄鍔の頸部が、時期が下るにつれて伸長するという変化と関連している可能性がある。鳥舌式鉄鍔の鍔身下半部の伸長は、同時期に盛行する鉄鍔の多くが長身化傾向にあることと、同様の背景を想定する必要がある。

鍔は基本的に、重量が大きくなるほど武器としての威力は高くなる。しかし、重量を大きくするために鍔身部の幅を広くすると貫通力が低下してしまうため、鍔身部の細さを維持したまま重量を大きくさせることが、武器としての機能を最も高めることに繋がる。つまり、鍔が長身化するという変化は、重量の増加を図ることであり、武器としての機能を向上させるための変化である

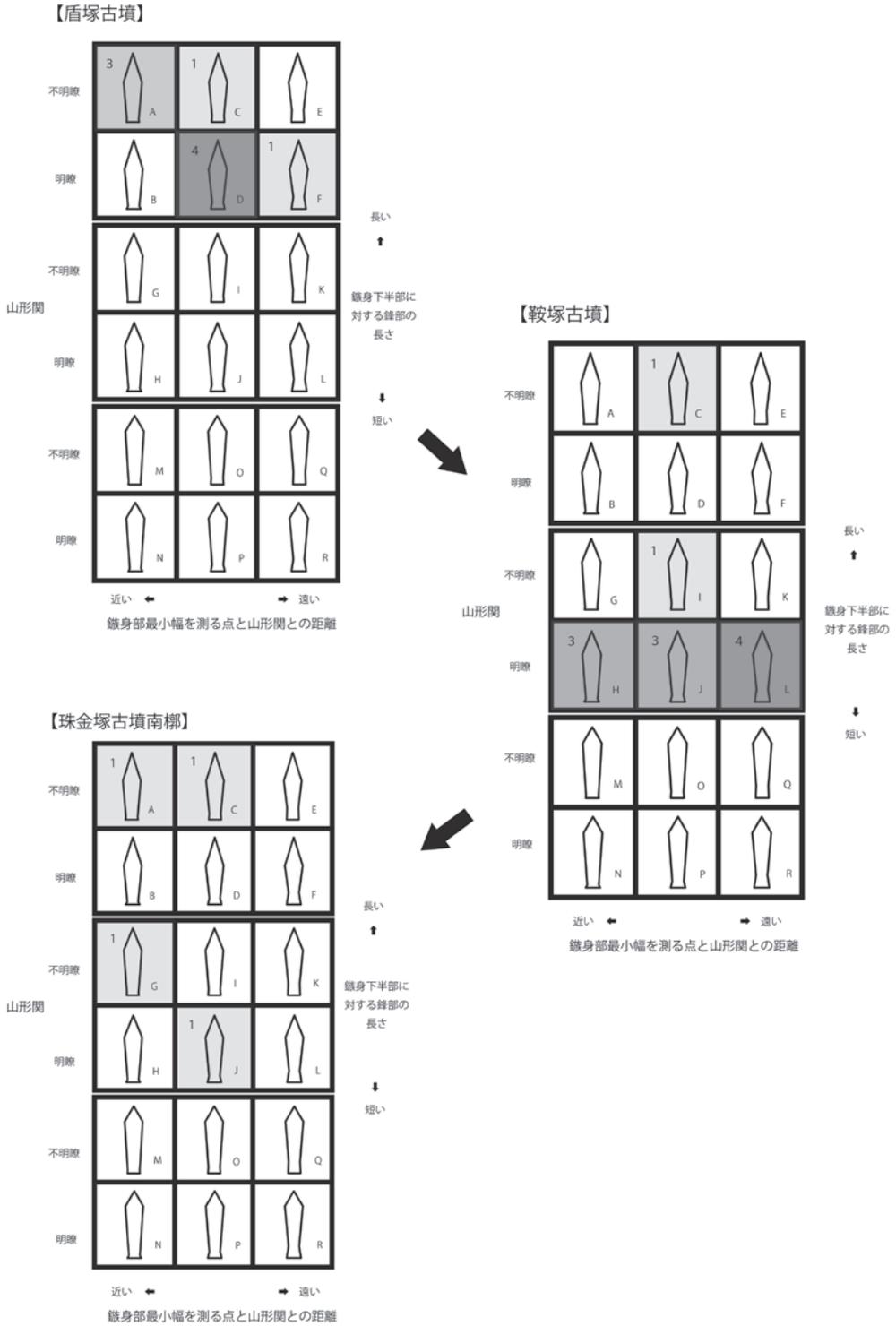


図13 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳南柳の形状分布

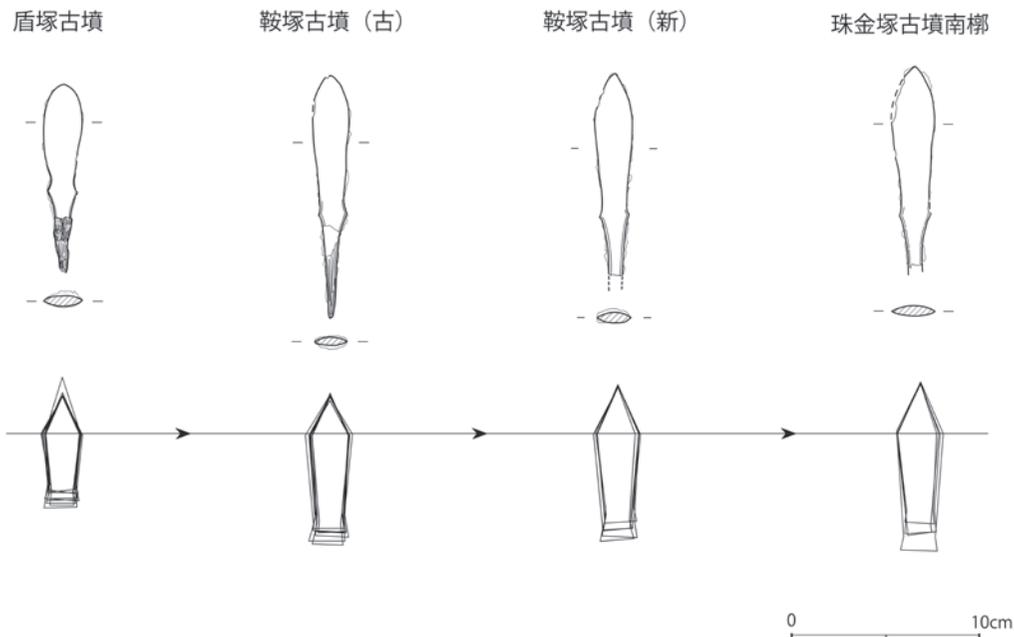


図14 鳥舌式鉄鏃の変遷

と理解できる。ただし、このことは、古墳時代中期前半の社会が、争いの絶えない緊迫した状況にあったことを意味するわけではない。鈴木氏が指摘しているように、高い機能をもった武器を所有していることは、「所有者の政治的優位性を示したり、社会の安定をもたらすことを印象づけたりする」ことにも繋がる [鈴木2000]。したがって、矢を用いた争いの有無は別として、より高い機能をもった武器が必要とされた社会のなかで、鳥舌式鉄鏃が長身化したと考える。

ただし、このように考えた場合、鞍塚古墳から珠金塚古墳南槨の時期にかけて、鏃身下半部の伸長が止まり、鋒部が伸長するという変化に切り替わることの解釈には課題が残る。これは珠金塚古墳南槨以降の時期で分析対象とする資料を増やし、改めて検討する必要がある問題である。

また、山形関の変化に関しては、鞍塚古墳の時期に明瞭なものが増える一方、鏃身部最小幅を測る点と山形関との距離に多様性が生じていることが確認できた。鞍塚古墳が築造されたと推定できる5世紀前半の中頃を前後する時期は、鳥舌式鉄鏃をはじめとした山形関を有する鉄鏃の最盛期にあたる。つまり、山形関を有する鉄鏃の社会的な需要が最も高まっていた時期であるため、山形関をもたない柳葉式鉄鏃と鳥舌式鉄鏃との違いを明確にすることが重要であったと推測できる。この時期に山形関が明瞭に突出するようになることは、そのような社会的背景を想定できる可能性がある。そして、鏃身部最小幅を測る点と山形関との距離といった細部に多様性が生じていることは、鳥舌式鉄鏃の生産に携わる製作者の数が増加したことが背景にあると推測できる。

しかし、この山形関に関する変化の背景については、本稿で取り上げた資料のみから論じることができない問題ではない。今後、他の古墳から出土した鳥舌式鉄鏃や、鳥舌式以外の山形関をもつ鉄鏃についても分析対象に含めて、改めて論じる必要がある。

おわりに

以上、鳥舌式鉄鏃の編年研究史における課題を基に、形状組成の変化と各部位の寸法の変化という二つの観点から、鳥舌式鉄鏃の変遷観の確立を試みた。その結果、鋒部と鏃身下半部がともに伸長するのではなく、時期によって伸長する部位に違いがあることを明らかにした。本稿における分析では、地域差と時期差による差異を峻別するため、極めて限られた資料のみから変遷を論じた。この成果を基に、他地域の古墳から出土した鳥舌式鉄鏃においても変遷過程を分析し、本稿で提示した変遷観の妥当性について検証する必要がある。

また第4章では、第3章で提示した鳥舌式鉄鏃の変化が生じる社会的背景に関して、若干の考察を試みた。その結果、推測の域を出ていないものもあるが、今後検討すべき課題を明確にすることはできた。今後は、山形関を有する鉄鏃の歴史的意義を明らかにするため、本稿で行った分析を軸に、各資料の変遷観と併行関係の検討を進めていく。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、内容に関して米田文孝先生から多くのご指導を賜った。また、資料の観察に際しては、関西大学博物館および田中詢弥氏に多大なるご配慮を頂戴した。記して感謝致します。

【註】

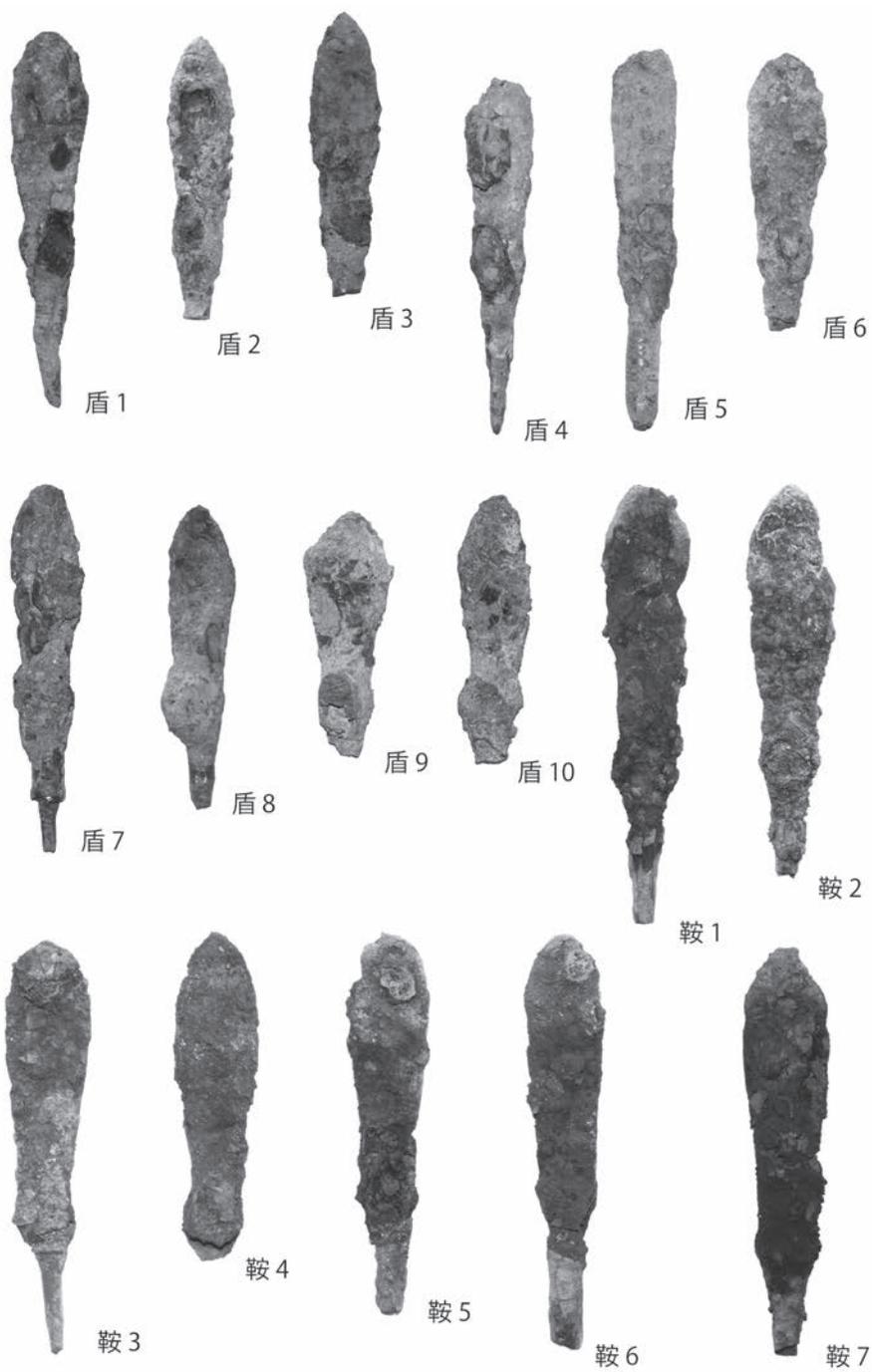
- 1) 鈴木氏は武器あるいは狩猟具の一部品としての鏃の機能を「実用的」側面という言葉を用いて表しているが、鏃にはそれ以外にも、所有者の政治的な立場や他の有力者との関係などを可視化させる機能が備わっているというのが鈴木氏の基点的な立場である。この「実用的」という観念と対比させる形で「象徴的」側面という言葉が用いられ、鏃のもつ実用的側面以外の機能全体を指す言葉である。また、鈴木氏は実用的側面が強調された最新の鏃にも、「最新の武器を有する」という象徴的側面が備わることを指摘している。このほかに、似たような意味で用いられる用語である「威信財的性格」とは、鏃のもつ象徴的側面のなかでも、それを保有することが所有者の威信を示すことに繋がるという機能があると考えられる場合に限定的に使用する。
- 2) 山形関は、研究者によっては「山形突起」と呼称される場合もある [鈴木2003b]。これは、山形の突出部を鏃身部に含まれる装飾的な部位とみるか、鏃身部と茎部とを分ける関の一形態とみるかという見解の相違に基づく。山形関に装飾的な意図が込められているという点については、筆者も同じ認識をもつ。しかし、それが鏃身部と茎部を分ける関としての機能を否定することには繋がらないという立場から、本稿では関の一形態とみなして「山形関」の呼称を用いる。
- 3) 短頸式と長頸式を呼び分ける際の基準は、研究者によって異なる。具体的な頸部長の数値で区切りを設けて長頸と短頸を呼び分ける方法は、その基準に近い寸法の資料を区別する根拠を示すことが難しい。そこで、本稿では鏃身部長との比率によって区別する方法を採用した。これは、鏃全体を見た際に、頸部の長さを際立たせる要素は、頸部の絶対的な長さではなく鏃身部との比率であるという観点に基づく。

【参考文献】

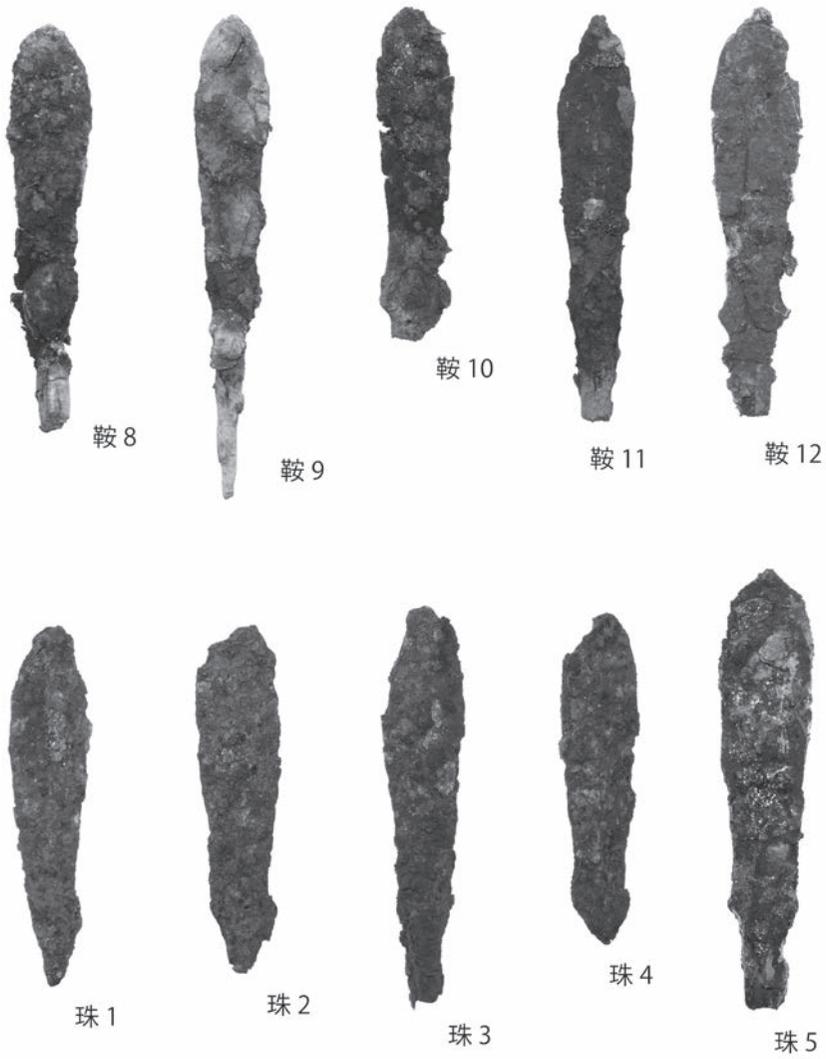
- 大空社 2016 『復刻版 貞丈雑記 第3巻（巻之9～12）』
- 川畑純 2015a 「五條猫塚古墳出土鉄鏃の製作系譜と編年の位置づけ」（奈良国立博物館『五條猫塚古墳の研究総括編』）
- 川畑純 2015b 『武具が語る古代史 古墳時代社会の構造転換』 京都大学学術出版会
- 末永雅雄 編 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会
- 末永雅雄 1969 「日本鉄鏃形式分類図」（古代学協会『古代学』第16巻 第2・3・4号）
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」（『橿原考古学研究所論集』第8）
- 鈴木一有 2000 「交易される鉄鏃」（『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会）
- 鈴木一有 2003a 「中期古墳における副葬鏃の特質」（帝京大学山梨文化財研究所『研究報告 第11集』）
- 鈴木一有 2003b 「二段逆刺鏃の象徴性」（静岡県考古学会『静岡県考古学研究』35号）
- 田中晋作 2016 『古市古墳群の解明へ 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』 新泉社
- 田中新史 1995 「古墳時代中期前半の鉄鏃（一）」（『古代探叢Ⅳ—滝口宏先生追悼考古学論集—』早稲田大学出版部）
- 松木武彦 2020 「古墳時代鉄鏃の変化と地域性に関する数理的解析」（2017年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（一般）研究成果報告書）
- 水野敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」（『橿原考古学研究所論集』第14）
- 水野敏典 2008 「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」（『橿原考古学研究所論集』第15）

【図版出典】

- 図5・8・11：末永雅雄 編 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会
上記以外：筆者作成
写真図版1・2：筆者撮影



写真図版 1



写真図版 2

